

こころのやうき

宗趣の巻

前編

大ミオヤ	一
あなたの前に在す大ミオヤ	三
近縁	四
宗教の中心本尊	五
ミオヤを呼び上げて御答が	六
聞えませぬか	六
誠	八
月にかゝる雲	一四
人生は修行に出されたのである	一五
大慈悲のオトサマ	一六
真のたより	二〇
見佛と云ふに二の意義あり	二一
三身即一	二二
大悲のミオヤ	二三
如来光明を火の性に例ふ	二四
宇宙の獨尊と個體の中心	二六

後編

日光と金剛石	二六
法然上人に反映する如来の光明	二六
心は西にうつせみの	二八
拍手の音を聞け	三一
皮敷	三二
御恵みの熱さ	三三
人生の宗趣	三四
生命	三七
道徳	三八
人生	三九
本迹	四一
舊約と新約	四三
不可思議功徳	四四
胎藏	四六
妙觀察智	四七

大ミオヤ

宇宙には一切萬物の中に萬物の大本となる大ミオヤ在ります。此大ミオヤを信じて之に歸命信順するのが宗教である。故に我佛教では釋尊は形は人間に身を受け給ひしかども其御本體は宇宙の中心尊にして本有常住の法身佛に在ります。其法身より身を分けて此の娑婆世界に御出ましなされたのである。故に釋迦尊は形の上より拜すれば人間の佛なれども其の御精神の内に入つて見れば宇宙全體が釋尊の心なので其中心に盧舍那如来と云ふ無量の相好光明を以て普く十方世界を照し給ふ御靈體に在ります。其靈體のルンヤナ如来と肉體形の上に現れし釋尊とは外より見れば別のやうなれども其の内面に入つて見れば一體に在ります。故に釋尊は其の内觀の一體なるよりして三界は我有て其中の衆生は悉く皆吾子であると曰ひぬ。一切衆生は其の毘盧舍那と云ふ法身

佛の分れたる子である佛性を有つて居る。けれどもまだ子は赤子のやうなものにて佛の性は具て居るけれども、いまだ御育てにあづからざれば佛の子としての働きは出来ぬ。

鬼まれ如来は我等が眞の大ミオヤに在ませども久遠劫來大ミオヤと離れて只此肉體のみを愛して心霊が御育てにあづかる事を知らずして乃至今日に至りて淺ましき凡夫の身と成つて居る。實に漸恥すべきである。幸に釋尊が大ミオヤの現はれとして此世に出で給ひ一ら大ミオヤに歸命せよと絶叫し給ひし御教に遇ふことを得しは實に眞に幸福である。然るに世には一の大ミオヤの在りますことを知らず唯だ我見我慢のみを増長して今現に此の肉體の生活をして居るのも全く大ミオヤが天地萬物の設備を以て我等を活して下さることを何とも思はず、只自分勝手の我見許りを張つて居る者の多いのには、大ミオヤに對して申譯なき次第である。世の中に親なき子程憐むべきものはない。況んや靈の大ミオヤを識らずして人生を闇黒裡に葬つてしまふもの程憐むべきものはない。幸に我等は大ミオヤの招喚の御聲に驚きてミオヤに歸し、日々に慈悲の乳房を含め哺育せられて益々大ミオヤの在りますことを眞に信認し得らるゝやうになりしことは偏にミオヤの御慈悲の然らしむる所と想へば何とも辱なし。されば一切の同胞衆が大ミオヤの在りますを識らずして生涯を闇の中に葬つて仕舞ふのを見れば何とも憐れ同情に耐へぬ。何かして大ミオヤの御手に絶る様に勧めず居られぬ。されば世の同胞衆よ、すべて靈あるものは悉く我子であると仰せられし如来の聖意を畏み體せられよ。

あなたの前に在ります大ミオヤ

大ミオヤは天地間何れの處にも在らざる所なき大ミオヤなれば、今現に此處に在りて、大慈悲の面をあなたに向け給ふて在ります。あなたは信じて居ますかまた信じませぬか。釋尊は如来は法界身、一切衆生の心想の中に入り給ふと仰せられた。宇宙全

體に周遍する所の靈體に在まれば何れの處とて在まざる所なく一切衆生の心想の中に入り給ふなれば、君はいかに注目して如來を見奉らんとおもふも、如來を瞻奉る事は太陽または月を瞻むやうに初から外界に心を注いでも瞻めませぬ。本如來は絶對の靈體にして大智慧の心として一切處に遍滿し給ふ。只あなたが一心に念佛する時あなたの心靈に入り而して之を投映する時に客體化して現じ給ふ。

近 縁

如來の眞法身と念佛者の心とは最も近い。どんな物よりも近い。いかにとなれば一室に在つて障子を隔つればも早や室外は雲外萬里の隔てがある。またそれよりは自分の掌も若し閉目して險一枚隔つる時は掌中の物も見えぬ。然るに我等念佛者の心眼の前には虚空遍滿の法身が扉を閉ぢたる中に於ても明瞭に見えて、それよりは近く、たとへ閉目しても了然と見ゆる。されば險の中よりも近い。これは直觀的に吾人の心と如來とは實には一體不可離の關係を以て炳現して居る。實に近縁である。唯だ内心に念佛なくして唯形のみを求むる如きは十萬億土のみにあらず實に無限の隔てがある。

宗教の中心本尊

大ミオヤは三身に分れて在ますと雖も元は一體である。法身としては天地萬物の本體にして一切衆生を生み且つ活して下さる御佛にて報身佛は私共の法身から受ける靈性を開發し又煩惱を靈化する爲に智慧と慈悲との光明を以て念する衆生を攝化し給ひ、應身としては人間世界に御出ましになつて人類にミオヤの聖意を教へ給ふのである。故に歸する所は一體の三面に過ぎぬのである。

大ミオヤより稟けたる佛性は自分の力で之を開きて圓滿なる徳を顯すことは出来ぬ。又自己の煩惱の惡質を自分で解脱して完全なる道徳と靈化する事も出来ぬ。佛

性を開發し煩惱を靈化して圓滿なる人格とならんには報身無量光如來の光明を仰がねばならんと信ず。故に報身佛が最も尊いので宗教の中心本尊は報身佛である。

ミオヤを呼び上げて御答が聞えませぬか

大なるミオヤは我十方法界を遍く照し、わけて我名を呼びて頼む者に答ふる心光を以て衆生の心靈に靈妙の響を與へ給ふ。さればあなたが一心に餘念なく稱名する時、あなたの一心彌陀に對して眞正面に心を向けて念する時はあなたの眞正面に在ますミオヤはまた眞正面にあなたに答ふるに靈なる響を以てす。あなたに御答が如何に聞え上げられますか。それともまた御答の聲が確と聞え上げられませぬか。御答の響が感せられませぬか。もしあなたが聞えぬと云はば、そは何故に聞えぬのでせう。ミオヤはあなたを眞實に愛して在ますことなれば、能くも遣る瀬なき親心を汝は思ひつきしぞ、眞實に汝が眞ごころから吾ミオヤよと云ふて呉れよかしと忘るゝ間はなきに、能くも我名を呼んで頼む心を發せしことと思召す如來に在ませば、何ぞあなたの稱名は御答なき等はない。斯やうな譯なれば必ず御答は有る等なれども、あなたがよそ心の爲めに御答を自分と聞きはづして居るのかと思ふ。實に甚深微妙なる御答の響は、齷齪な思を以ては聞え上げられぬ。

私には御名を呼び上る毎に微妙の靈感を以て答へ給ふことなれば、ましてあなたに對して御答なき筈はない。然れば如何に心を致して御名を呼び上げれば、ミオヤの御答の響が聞え上げられるであらうとなれば、私は斯やうに心を至して念じ上げ、また御答の響が聞え上げられます。眞實に如來様は私の眞正面に在することを信じ、深く念ひ上げて、ナムアマミ佛と餘念なく、己が心の統一するまで念佛して居りますと、漸々に心も靜りて餘念なく、只だ如來さまの御慈悲の面かげが自づと彷彿として思はれて来る時に、何とも云はれぬ辱けない有り難きの靈感が感じられて來ます。これぞ如來の靈妙の御答であります。如來の御答は耳には聞えぬが、直覺的に心に聞えられ

るのであります。あなたも斯やうに念を用いて一心に心を至して念佛して真正面の如來に向つて念じ上げ何時までも心の統一するまで念佛し、如來の靈響を聞き給へ。始めの程は仲々二時間も三時間もかゝつてもそれはあなたの一大事のことですから辛抱なされ。段々に時間が短くも統一が出来て益々純熟するに随つて遂には念佛さへすれば、忽ち三昧に入つて如來の靈響に充たされる妙境に入ることが出来て來ます。此の即ち感應同交と申します。此の感應同交が宗教の唯一の機關であります。若し感應の聞きぬは、古人が、

祈りてもしるしなきこそしるしなれ、己が心に誠なれば。

誠

誠に消極と積極の両面あり。只偽らざるばかりの消極的計りでは積極的の價値はない。積極的の誠とは内容の充實した所にある。内容を充實せしめんには至誠心に彌陀を信じ、彌陀を愛し、世つきたらんと欲望し、其の内容の充實する所に價値あり。譬へば稻の果が能く實りて成熟せし如くに内容が出来てこそ其の誠で、果が充實し成熟せし種子は播いても能く萌生々育す。我々が心靈も全く彌陀に成熟する時は淨土に生るゝ。種が熟せし如く生産作用の能力を具有したならば眞の價値ある誠である。誠は形式即ち容器である。即ち彌陀の靈徳を受容する容れものである。その容れ物たる誠の心がなければ受けたる徳も失つてしまふ。

如來を眞實に信ず。信は信受と申して如來の眞實を我心に受容するは信である。彌陀の眞實を信受する時は凡夫の身は卑しくも、至心の内に宿れる彌陀の聖種は實に尊い。經に喩を以て、婢女に轉輪王の聖胤を宿す時は卑女の腹は卑賤なれども内に胎れる胎子は頓て輪王となるべき聖徳を有つて居る其の如く今凡夫は愚かなれども其信心に宿れる彌陀の聖種は後には頓て不退の菩薩として無上地位に入るべき性を具して居る。斯の如くに我に聖種を賜る彌陀聖王に對しては實に愛樂せざるを得ぬ。また我

等が愛の対象たる彌陀は最も圓滿に完全なるすべてに超えた人格でなくてはならぬ。宇宙間に唯一無比でなくてはならぬ。若しもより以上の人格者實在すと聞く時は或は我等が心は動かざるを得ぬ。より以上の人格に心を遷らざるを保し得ぬ。故に我等が彌陀は威神光明最尊第一にして而も知慧と慈悲と及び一切の萬徳圓滿して一切諸佛に超へたる大靈的人格として神尊として尊敬すると共に滿腔の愛を捧げて彌陀を愛し敬して居る。すべてに超えし愛を以て只彌陀に容れられんとして居る。愛は生命である。然れば即ち彌陀は我靈の生命の源である。彌陀の靈格を愛慕して忘れんと欲するも忘るゝ能はざる愛樂である。毎日、東の海の清き水を以て面を清め洗ひながら昇る朝日の白いのを見ても直ちに最愛する所の彌陀の慈顔を思ひ出さざるを得ぬ。信ありて愛なきは甘味がない温みがない。我と彼との間に血が通はぬ。さればあなたの心の奥に彌陀愛樂の温みと聖き血とが我と彼との間に通うて居りなさるか。忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざる爲に身を命をも惜みやらずと云ふ様な愛がありや否や。彌陀に愛慕して之が彌陀の御心に叶ひなば寧ろ死する方に苦がなくなつても足らぬでせう。されどそれ程に現れ居らぬまでも心の底には愛して居ると認めて居る。如何となれば今現にあなたの信念の生命は彌陀に依つて未來永劫をかけて生命として居る。あなたは鬼まれ如來の實在を信じてそれをあなたの永恆の生命として永恆の我なる生命は彌陀に在る事と信じ愛して今現に生きて居るのでせう。愛に於て若しも彌陀尊と云ふものは實在せぬと云ふ確平たる證據が発見したならば、あなたの永恆の生命と頼みたる心はいかになつてしまふのでせう。夫こそは落膽失神してしまふのでせう。

あなたは其の場合に左程に落膽しませぬか。若し彌陀の實在を全く否定さるゝ事實が到發したならばあなたは精神的に死ぬでせう。彌陀の靈光明につながらる生命にして前途永遠の光明として居る生命にぶつ切り割斷せられてしまつたならば如何なるでせう。それでも此の肉の生命さへあればよいと平坦としてすまして居られるでせうか。若しも其の場合平坦として居らるゝならば、あなたは本より心の奥底に彌陀と繋る愛

の生命が生きて居らぬ故であります。

斯やうな工合にあなたの心の奥底に最大の生命として彌陀尊を愛して居るに相違ないに其の愛が内肛して居つて愛の熱が發しきれぬのかも知れぬ、或は其の内肛して居る所に却つて病氣が重いのかも知れぬ。

徳本行者が『あみだ〜と戀する人も胸にはとけの絶へ間ない』と詠まれたなかに彌陀愛慕の消息が洩れて居る。

宗教は自己人格の向上を宗とする宗教が高尚である。唯だ極樂の快樂を貪る動機のため爲めの宗教は悪いとは云はぬまでも人格向上の動機には遠い。彌陀と云ふ絶對的圓滿の人格を心の底から愛樂して其の圓滿なる光輝ある人格を常に離れず之に愛慕し信樂して心々念佛し、其愛樂する人格に同化して自分も如來に似合うやうに成ることを宗として信樂する所に宗教の價值がある。

二祖上人の念佛三昧は不離佛值遇佛と申して常に佛を離れず常に佛に值遇する所に吾人を指導して常に光明中に行爲せしむる大なる力あり。されば如來を愛樂して常に念々佛を念じて離れざることを要とします。

月にかかる雲

古人も煩惱の犬は追へども去らず。菩提の鹿は招けども來らずと。されども、いと敬愛するところの尊宿よ。煩惱即菩提なれば、肉體が最も愛するところの或對象物に對する情の深ければそれと同じく靈の對象たる宇宙間に二つとなき三つとなき釋迦尊もその他の十方諸佛もみなひきつけらるゝ

あみだほとけにひきつけられて、頭より爪先きまで、凡て全部を放げ込んで、此世より永遠にまで離れぬやうに成りたまはれよ。されども淨滿月のみすがたを瞻まんすとすれば、ます〜浮雲のためにさへらるゝことを歎くとの事なれども、されども群り來る雲も月の光に映ろひて、一しほまた月をかざりの因縁ともならぬ限りもあらざりしならめ。兎にも角にも群り來る雲の心は月のそれとは異りて須臾の間こそは月を失はしむるやうなれども、しかしそれは永しへに在るものならざれば、かまへて尊き御名を通して慈悲のみすがたに接するおもひをなす時は、いつかは煩惱も即菩提の月と成る時は必ず來ることを信じて一に彌陀のお慈悲を仰ぎ給へよ。

人生は修行に出されたのである

佛教に積極方面と消極方面とありて、消極面より見れば現世界現人生はかく人間になど生れ出さればよいものをそも〜六道に迷ひ出したのが生死の苦を受けねばならぬ運命に陥ち入つたのである、故に是非此の迷から出でざれば眞の永恆の生命に入ることとはできぬと。

積極の方より云はゞ、法身の大ミオヤより必然的に修行に出されたので天にも地にも此の五體五根六識にも本より罪はない。大ミオヤの聖旨に隨はざるのが罪である。無論現人の身心は完全ではない。されども報身の光明を被りて靈化せらる可き性能を有つてゐる。即ち佛の子として光明生活に入らるべき可能性を有つてゐる。

人類は高等生物の故に宗教の要あり能あり。礦物でも劣等なる石は琢磨の要はない。

人類已下の動物は宗教を以て脱却すべき要はない。人類は金剛石の如くに琢磨せざればならぬ性を有つてゐる。是非とも報身の光明を被りて靈化せねばならぬ。それが即ち法身の**大ミオヤ**より産み出されたる佛性の卵を報身の慈悲と智慧の光明によりて靈化せらるべき性を有つてゐる。折角に人間と云ふ學校に選み入らされて十二光の光明に依つて信心開發の生活に入つて**大ミオヤ**の子として此の學校を及第せねばならぬ。現在の生活は日々の二三萬の米が生命を獻げて我等に食と成つてくれるので此の人間の肉と血となつて**大ミオヤ**の光明生活に入るべき身に成らん爲めに米は犠牲と成つてゐる。若し日々二三萬の米の生命を己が血肉と爲して居つて日々に餓鬼の精神生活を爲せば食はれたる米まで餓鬼道に墮ちてしまふ。我が責任は重い、此重い責任はとも自分の力では擔はれぬ。無限の力ある**大ミオヤ**の光明を仰ぐ外はない。

大慈悲のオトーサマ

大ミオヤは我は虚空遍滿の全身を以て永しへに可愛き子たる汝を見つゝある故に汝もまた最も親しみのあるオトーサマ、ナムアミダ佛と我を呼べよ。本とうに我は汝のオトーサマである故、虚なく我をオトーサマと呼べよ。我は汝が久遠劫來オヤの許を離れ光り輝きつゝある我前を背ろにして六道輪廻の闇のちまたに彷徨うをいかばかりにか氣づかひに思ひつゝあることよ。子を思ふ親ほど親をおもひなばとは、肉の親子の間許りでなくて誠に、汝をおもふ**ミオヤ**の慈悲なることを念れよ。尊宿よ、いつも、夜も晝もまた行く時も寐る時もしばしも離るゝことなき**ミオヤ**を、あなたは眞實にしたはしくおもひなさるか、まことに、懐かしくしたひなさるか。

空海上人の道詠とて

空海が心のうちに咲く花は彌陀より外に知る人はなしと、子より眞實に**ミオヤ**を知るやうになれば本とうに此我等がこゝろは**ミオヤ**より外に知る人はなし。此の程、此の道詠の彌陀より外に知る人はなしといふ意に就いて一人の信仰の告白には、本とう

に私共は自分勝手のわろき心朝から晩まで苦みどうし煩惱のために常に惱みどうしである此のこゝろの惱みもだへは何人に語らうとも只世の人はウハへにこそ同情は寄せてくれ、内心はア、又恐痴をこぼす男哉とおもうて眞實に我身のなやみを我なやみとし、我悶を矢張り御自身のもだへとして同情的に眞底まで知り給う御方はたゞ彌陀の**ミオヤ**の外にはよもあらず。十方三世の諸佛は智慧の光を以て我らが淺間敷さをこそ照見し給うならむも全く同情の慈悲を以て知り給ふのは只一人の**ミオヤ**ばかりと思ふ。實に**ミオヤ**ならで此悶をもあたゝかに融合して悦びとかはらして下さる御方はなしとおもへばいよ、慕はしくてと。

また一人の曰うには子を持つて親の心を知るので、此坊が本とうにかはゆくて静かに抱きて笑顔を見ると世の中にはほどまた可愛いものはなきことよ矢張り**大ミオヤ**ナムと云ふていただきつく私を可愛くおもうて下さる御慈悲は此子に對する私のこゝろのやうなものにおはすらむ。さればこそミダより外に知る人はなし。世の中になとい何萬の女が居やうとも私の見るやうに此坊を可愛く見ゆる眼は私の外にならうと思ひます。三世諸佛の中にも彌陀ほど此私のことを可愛くおもうて下さる御方はなからうと思ひますと。

また一人の解するのには、人間どうしの義理や人情など云ふことは禽獸には恐らく解することはできぬとおもふ。感情上の美などいふても彼等には分らぬとおもふ。其の如く私共の人間の子どもに生れて而も成長して人と成つたからこそ人間のすべての事も解せらるゝ。若し犬の子に生れて犬であつたならば人間の複雑な精神のことは解せられまい。その如く私共は人間の子であると共に佛の子である。だから人間の子としての成長したばかりでは人事上の事は解らうが、もつと、廣みのある深みのある而して微妙なる靈明なる佛の御精神に經驗し給ふことはわかりませぬ。恰も犬が人間のこゝろが解せぬやうに、そこで佛の子としての心の花は開くに隨つて眞實に甚深微妙の眞理がわかり廣い、大きい、**ミオヤ**の心の海が眺めらるゝ。だから

今此ミオヤに融合しまた知見せられてある此微妙の心の深みはミオヤより外に知る人はない。ミオヤと共に眺めつゝある常樂我淨の園に眞善微妙の華の咲き匂ふころの色麗はしさと香ばしさとは、みだならで誰か知り給ふものぞと。

維摩經に如來一音演說法、衆生隨類各得解と、道詠に對する人の感まぢまぢにしてまた味あり。

眞のたより

黑白の鼠の爲めに命の藤根を嚙まれつゝあるを識らで暮す身の果敢なき我らが生れつき、眞に依頼するに足ると認むる此世界も實は永く我を此地上に留め置いて呉れぬ。今に此の地球より振り落されて陰府の中右に彷徨ふべき運命なる此身とおもへば實にもろき運命を以て此世に出でたる我等にて候。只眞に永遠に頼むべきは絶対永恒の阿彌陀如來を頼み奉りて此世及後生哀感覆護を仰ぐ外之なく候。

見佛と云ふことに二の意義あり

見佛と云ふことは二の意義あり候。

一には念佛して如來の慈光を被りて眞に信念が生きて來る時は、例へば小兒が生れた計りでは親の容さへ見へぬが、乳に哺養せられて、からだが発育するに随つて次第に眼も發達する故に親の容を見ゆるやうになる。實は小兒の全體が発達する故に眼も見ゆる如く、見佛と云ふも實は心靈の全生命が生れ出し其の兆候として、心眼の見佛と云ふのである。換へて云はゞ、活きた信仰になれ、如來の光明に依つて靈に活きよ、活きた兆には佛を見奉らんとの意味にて候。

二には先きに述べし如く精神生活の上に常に守本尊として人格的の如來現前し給ふとの信仰は、宗教上の最も宗とする所に候。各寺の本堂に本尊を安置し奉る所以、また各檀家の佛壇に本尊を安置する所以の如く、人々の信仰の頭上に常に如來を安置し、

各活ける佛壇を空にせずして、自己の本尊の指導の下に日々精神生活行爲を爲すを最も宗教の宗とする所なりとす。斯の理を以て人格の本尊を確立する所以なりとす。

三身即一

超然教即ち天臺に云ふ別教のは、三身各別の報身を本尊とす。別教は實は方便教にて圓教の彌陀は三身即一の報身にて是眞實教にて候。

淨土宗にても了、西二師の如きは三身無碍の報身を以て淨土宗の彌陀とす。また宗祖の撰擇集に名號を本願とするに二義あり。一、勝の義、曰く名號に四智三身十力等一切内證外用攝在す云々。名號すでに三身具す。若し三身相離れて只報身のみならば名體萬徳圓滿ならず。法身報身應身の聖名に歸命し奉るとは、即ち南無阿彌陀佛のこと、甲は義を以て乙は法を以て名體法中已に三身相即す。

圓教の三身即一の報身を本尊とす。一體三面の報身如來を表面とし本尊とする事にて候。殊に現在の萬物は法身の御恵み、心靈攝化は報身の御慈悲教法を信知するは應身教祖の御力、斯く三身は如來の方より云はゞ一體にて衆生の方より見れば三身を欠いても私どもが身に靈に教に活ることはでき申さず候。

宗祖の名號萬徳に三身具徳をのべませるも、また中興の了、西、兩師の如く淨教の立宗判教の爲めに彌陀の宗義の最勝なるを顯彰せん爲めに書を著し説を立てたる爲めに淨宗の今日あるに至れり。

大悲のミオヤ

如來は一切衆生の御親である。ミオヤを眞實にミオヤと信するのが信仰に入る第一歩である。如來を眞實にミオヤと信する時自己は佛の子である。眞の佛子と自覺するのである。如來はミオヤにて自己が佛子と自覺する時は他のすべての人は悉く同胞で

ある。すべての人が眞に同胞と信認する時はすべてに對しておのづから親切に成らざるを得ぬ。

如來光明を火の性に例ふ

如來の光明法界に周徧せば如何なる形相あり亦いかに認め得可きか。曰はく如來の光明は法界に周徧すれども見聞する事は出來ぬ。然れども實在することは否定できぬ。今例を以て明さん。例へば火大は法界に周徧すれども火性は目撃することはできぬ。火は薪炭の類に燃ゆる時は形相を以て見るべきも純粹の火性のみは認むることはできぬ。如來の光明もまた然り。實に無限性なものなれども人の心意に感じて初めてすがたに顯るゝなり。

宇宙の獨尊と個體の中心

宗教は人の個體に自我なる中心有る如くに宇宙にも中心獨尊の存在を認めて之に個體の中心なる自我が大なる宇宙の中心獨尊に歸命信賴して永恆の安心を得る所にあり。個體の中心が益向上するに隨つて宇宙の中心の尊貴なることを認む。個體に靈性の尊貴なる性能が發揮せざれば宇宙の中心尊格を認むること能はず。故に宗教心を發達せしめんと欲せば先づ現在の肉の我は動物的我にして一心に宇宙の絶待的靈界の中心獨尊は威神無極最尊第一なるを信して無上の尊敬を以て常に禮拜し至誠深心に絶待尊者を歸依し念すること久しければ漸次に靈性が發揮する故に彌々大靈的尊格を信認して最尊く感ぜらるゝ宗教心が發達す。宗教心顯示せざるものは宇宙の尊靈を認むるもまた尊崇性が發達せざる故に客體の尊格を感知する能はざるなり。例せば動物には高等なる靈性が全く發達せざる故に如何なるものに對しても尊敬心が感じられぬ。人類は知識其他の感情意志等が發達しても尊崇性が發達せぬ者は絶待尊格に對して尊敬の念が起らぬ。彼には高等なる宗教心が缺けて居る故に動物的である。動物の頭腦

には高尚なる宗教性が缺けて居る故に最尊靈者に對する尊敬の念はない。自己の尊崇性が高等に發達すればする程絶待尊に對して尊敬の念が深い。故に尊崇性の發達せるものは人格も最高等である。

日光と金剛石

太陽が平等に照すに此光を反映する鑛物中高等なる鑛物程太陽の光り能く反映す。氾濫なる鑛物は反射の度が少ない。鑛物の緻密なる性質のものほど反射の度が強い。金剛石や水晶杯は日光が強く反射す。日光と性質が近き故である。宗教的尊崇性の強き人は寶石の如くに如來の日光が著しく反映す。古來宗教的偉人は金剛石の能く磨ける如くに靈性に彌陀の光明を反映して釋尊の如く輝くなり。

法然上人に反映する如來の光明

靈性の金剛石は本來具有す其量に於いては大小あらん。金剛石靈性具有すれども之を琢磨するに非ざれば其の靈性を發揮するに至らず。法然上人は常恒不斷に念佛して彌陀の大靈と自己の靈性とが念々にすれつもつれつ一心金剛の如くに堅固にして如何なる事にも屈せず掩ます念佛して彌陀に磨かれたる故に信心の金剛石の靈性能く發揮して最高等なる宗教心が成就せり。故に法然上人の寶石には常に彌陀の光明が反射しつゝあり。例へば寶石に日光が反射する如くなり。法然上人の靈的偉大なる所以は彌陀の光明に反映せられたる處にあり。されば法然上人は肉體は人間なれども其心靈は即ち彌陀の光明に靈化せられたる分身の彌陀である。されば時人が形を見れば法然房實を申せば彌陀如來と敬はれしもまつたく是れ彌陀の光明に映じたる法然上人故である。若し法然上人の頭腦より彌陀の光明を全く除去去らば残る所は只人間の法然上人のみ。靈界の偉人としての法然上人は全く彌陀に充滿せる人格のみ。恚の如く人格の光輝を放つは常恒不斷に念佛して彌陀の光明に磨かれたる結果に外ならず。

人々皆悉く佛性あり。一心に念佛して金剛の靈性磨く時は彌陀の光明反映して法然上人の如くならん。たとへ材の大小はありと雖、念佛して能く磨く時は必ず彌陀の日光反映せん。

心は西にうつ蟬の

此の頃の蟬の鳴く聲を聞くにつけても自づと思ひ出づるは法然上人の

あみだぶと心は西に空蟬の、もぬけ果てたる聲ぞ涼しき

の道詠にて、何とも懐しく感ぜらる。彼の蟬はもぬけ骸よりぬけ出で、中實はいかにもきよく潔く聲を涼やかに歌うて居る。私共も一心に念佛する時は此身はむくろの夫と同じやうに成りて神は彌陀尊の中にぬけ出で、我を離れてあみだが我があみだかとまでに成りて稱ふる時は心はいかに涼やかに其心のいかにもすがすがしさが自づと聲にあらはれてすゞしき音すなり。それとも兎にかく口には御名を唱へても心はよそ事にのみ構ひてあらばそれは中味のなきむくろにて、否たゞにむくろのみにあらでくさぐさの難念妄想のみに取ひ居たらば唯だ口を費すのみ。されば聖法然上人が念佛してミダに深くほれと想ひ込みたる心の内こそゆかしけれ。實に其あみだ佛に神を遷したる上人の心は宛がらみだに異らず。されば時の人々が形を見れば法然房實はあみだ如來とひとへに歎美したるも理りなり。

彌陀尊は光明普ねく平等に照り渡りてまします。こなたが其光明に接せんが爲にミダ尊に真正面になりて心をミダ尊に致す時はアナタの光明はこなたの頭上より全身に入り來りてこなたの心がいつしかアナタの心と同じやうに化しぬるを疑ふことなかれ。

世には眞のミオヤの聖名をだに知らで空しく人生を闇の中に葬り去る人こそは實に憐れにこそ。併し乍ら怒かる人とても同胞たることは異らず願くは世のミオヤを離れたる同胞の爲めに一掬の涙を注ぎてミオヤの聖意を御知らせ申さばや。また世は日々

幾千萬遍となく稱名し乍らも心には毫もミオヤを慕はしくもまた懐しくも思はで稱名は唯だ死後の冥福を祈る呪文のやうな族も少からぬ。同じく同情に耐へぬ。

南無あみだ佛と御名よぶ眞正面に彌陀世尊は現に在ますなり。若し彌陀世尊はましまさぬに御名を呼び奉るは無意義の事にて、實に彌陀世尊なる絶待人格在ます信念によりてこそ始めて活ける信仰とはなるなり。

心本尊と申すことは吾等が心中に何時も離るゝことなき尊き活ける本尊をおする甲置く事なり。例へば大殿の中臺に御尊像を安置する如くに私共の頭の中臺に彌陀尊を安置して常に御本尊の威神と慈悲の光明に照され邪と惡とを捨て正と善とに就く御みちびきにあづかることなり。我らが心本尊とは吾曹が面前に如來は萬徳圓滿なる絶待人格として眞正面に在まして圓かに照し給ふ事なり。此信念の前にはいかに我曹が如き淺問敷ものも自づと清く高く靈に有り難き心と成る。威神の光明赫々として我らが頭上を照し給ふを想ひ奉れば自づと私共は歸命頂禮の心が起きて何とも尊く感ずるなり。また彌陀尊の慈悲に充しめ給ふ御すがたを想ひ奉れば何とも云はれぬ御懐しさとかたじけなさを感ぜざるを得ぬ。

拍子の音を聞け

禪の公案に隻手の音を聞と云ふあり。禪は形式的の悟道なれば自己の先天的の自性を聞き即ち無聲の音を聞くに無聲の聲を以て自性を見るの手段とす。禪には宗教的客體の神を立てず。自己の本來の自性顯れ來る處に見性成佛す。今念佛門には其れと反對に我等が信仰の客體に阿彌陀佛を本尊として之に歸命信順して其双方の間に最も完全なる親密なる關係即ち兩方の合致した處に初めて宗教心が成立つ。之を衆生心水淨む時は佛日の影中に宿る。月は天に照して影水に映す。月如何に皎々たるも水無き時は影を現はし難く、また水は満つるも月なければ反映せず。衆生の信心と如來の恩寵の和合する處に感應同交し、此双方の關係は實に親密なるを要す。

如來の大慈悲心に衆生心の和合する處に感應同交初めて眞の宗教は成立つ。而して此双方の關係は恰も兩手の相拍手の處に拍手の音は開ゆる如し。故に今は自心が彌陀に合して感應同交の妙音を聞くことを得て始めて眞實の信仰は得たるものとす。唯だ此の感應同交を言語の上のみに會する如きは、まだ眞の拍子の音を聞くと云ふに足らず。須らく三昧發得して眞の拍手の妙音を確と聞き、また彌陀の答を聞くべし。

皮 殼

我等はミオヤの子たると共に人の子である。人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮殼が強く結び付いて居る。是が爲めに、動もすれば自己を暗黒に引込まれて惡道に陥れんとして居る。佛子としての聖き心は微にして却々顯れ難い。ミオヤの恩寵を被り光明に靈化せられて疾く光明の下に生活し得るやうに専らミオヤの恩寵を仰ぎ慈光に導かれん事を期すべきである。

御恵みの熱さ

此の頃の熱さいかに感じなされ候や。私ども衆生が一ヶ年のいのちをつなぐべき、いのちのね(稻)を養うて能き稔をなさんとの準備としての、あつき御恵みの熱さに候。之の熱さがつよきは強きほど、大ミオヤの御慈悲の深きにこそ。若しも此の熱さがなければ私どもの命をつなぐべき稻の豊稔は得て望むべからず候。されば熱さのつよきを有りがたく感せられ申候。

人生の宗趣

念佛三昧爲宗。宇宙の主なる彌陀と三昧交感又は光明獲得を宗とす。往生淨土爲趣。光明の生に復活又は更生。現在は理想的涅槃光明生命(未來は實在的涅槃)。

宇宙絶待の主なる如來。衆生心中に靈應身を以て交感す。斯の靈感即ち宗教的生命なり。如來の靈應常に衆生の心殿に在して中心本尊として指導し給ふ。已に復活して靈的生活として光明中にありて如來照鑑の下に活ける如來を本尊として一切の時一切の所に於いて其神聖なる統治の下に靈き生命として事へまつる。

大宇宙の中心最高なる法界宮に在して眞善美妙を以て莊嚴せる如來は衆生の機感に應じて衆生の信心心中に映現して其の心宮に靈應身を降臨し給ふ。是れ宗教的中心の本尊なり。

此時に從來の我は降服して如來の法子として聖き生命に更生したるものなり。靈應の指導の下に光明生活の向上の一路の光明大道。

宇宙の最高至尊の在す華藏世界に向つて其の如來照鑑の下に往邁進趣す。之れ現在に理想的に光明中の法子の進む大道なり。爾々命終つて正しく涅槃なる華藏界に實在的に生れて文殊普賢の行願を學ぶべきものなり。

在す。初もなし、終りもなし。何ぞ死生あらんや。

人生の不幸は毫も我が個人性の存在より生ぜず。唯物欲の満足を以て人生の幸福也と誤解するより生ず。唯理性を以て物欲を制し、理性的自覺の生命の下に、個人的肉體の生命を服従せしむるなり。之を沒我と云ひ、大悟と云ひ、靈的生存と云ふ。

(道 德)

道德進歩。宗教道德は個人及び社會的理想と無限に進歩し、道德生活は永久に昇上し、天國を顯はすものと信ず。神學、形而上學及び進化論も、個人及び社會進化し生活の増大其れと順應したる社會状態となり、快樂は苦痛に優るのみか、苦痛を離脱せる理想社會に進化す。

道德法。道德則は意志の規定にして、善惡の標準を與ふるものなり。道德法は神の指示する所に隨つて、(キリスト)、或は絶対精神の現れたるもの、()、また天理(儒教)自然の法則、或は經驗的社會的に形成せられたり等、其法則の成立の見解を異にし、其道奉する態度も異なるなり。

敬虔的信仰を以て守り、絶対的哲學的信仰を以て守り、天人合一の思想を以て、或は自然と相連る合理的態度、社會日常の事()任意の約束の如く想ふて道德法を守る、次に道德法は目的法にして、當爲と不當爲の義務的自由()之を爲は必ず罪ありと認めて法則と云ふ。

道德は他人より強らるゝに非ず、内に自ら感じてまた何等の目的理想を豫想して性格動機意向ありて是非當然と解するを得るも常人が目的による自由の自己活動と意識するに妨なきなり。故に道德法は目的法なりと云ふ、自律とは此意味なり。

人 生

ト曰く、人に二個の生命あり。一は肉と共に終る、之を動物的生命と云ひ、一は自

(生 命)

學の要とする所は、宇宙を一貫する道、即ち不變の法則を、恰も鏡面に映するが如くに、道の本體其物に至りては全く()理的自覺に任すべきのみなり。

如何に生き、如何に死し、如何に進み、如何に退くべきは、智識にあらず、他人にあらず、實に是れ我が理性の光のみ。

「人若し新に生れずんば、神の國に入ること能はず、是靈的自覺に本づける、新なる生存に甦るを云ふ。人こゝに眞の幸福を得。此の幸福の人生を悟るものは、永遠の生命を受くべし。

ト曰く生命とは活けるの謂なり。即ち永遠に存在するものならざるべからず。生れて死する肉的生命の如きは、豈之を生命と稱するを得んや。生死あるものは初めより生命にあらず。時間空間に規定せらるゝものは生命にあらず。眞個の生命は唯單に存

覺する時初めて生すべき理性的意識（心の生命、靈的生命）是なり。一は動物共通自然的、一は人類已上の存在、超自然の生命、靈性覺醒せる自己の存在を意識し、始めて生命を自覺する。前の生命も夢中の幻像及小兒は己に肉の生命（）すまた自己の存在を意識せず。

靈的生命は誕生の年月を知らず。また肉の如く父母によらず。靈の誕生は五十歳にして自覺するもあり。靈的生命は或る他の靈的存在との連絡交通より生ずる賜なり。其物は數千萬年前の昔時よりの存在なり。然るに人は時間空間に規定せらるゝ動物的生命を以て唯一の生命と誤解する結果、自ら覺醒する時駭然として迷（）掃し、最早從來の生涯を系驗すること能はず、此の煩悶苦悶危機失望落膽極まるは一に肉生が靈性と混同したる結果從來の生命の我は實は夢幻態に過ぎず、自己の立場を失し、何かで失望せざるを得ん。譬ば一の婦人あり、彼女性の性質にして無智、一朝にして懷妊せり、身體異狀にして健康頗る其度を失す、彼女我病を得たりと憂惱措く處を知らず、安ぞ圖らん、是れ人の妻たる本分を完うし、母たる天職を擔まんと、最も喜ぶべき慶事なるを。斯の如く靈の生命も苦痛なる肉的生命の中止と共に生る。

靈的生命を以て人生と覺る時、何の矛盾あるなく煩悶なし、靈的生命を以て肉的生命を支配する是れ人生の基なり。

ト曰く、理性とは何道、即ち宇宙の道理と認識するの能力なり。人理性の覺醒に依らずんば宇宙の道理に従ひて新なる生活を開始すること能はず。道には（始に道あり道は神と共に在り道は即ち神なり）道は宇宙の原則萬物之より生じ其中にあり、道は定義を附べきに非ず、形容すべきにあらず、唯直覺に意識するのみ。自性理性自覺の存する所以道は萬物を結合するの連鎖なり。人々共通の理。道は人の依て生存完成する所依の法則。一切生物之に則て生存し成熟す。天體之に依りて運動して違ふことなし宇宙を支配する法則即ち吾人の（）る同一法則。道は宇宙を一貫し萬物に普及す。此道明かに我にあり。之に依て活くる法則なり。外界の法則は吾人左右する能はず、

内界の法は自ら自由なり。我は道其物の發現に外ならざればなり。道我即ち自己を吾人は自己内部生命自覺し完成し、肉をして理我に服従せしむ。人生の法則を成就して眞の幸福を圓滿する自由に達す是吾人唯一の生命。

迷惑の學の爲に徒らに事物の皮相に走り幻夢を捉へて妄に本體に。彼等は萬事を知るも眞實の自己を悟らず。眞の知は人生を指導すべき理法其物を自覺するにあり、之は自覺の外なし。

本 迹

如來と佛陀とは本來一體の同一の法。如來を離れて佛陀なし。また佛陀の心靈を外にして如來を知ること能はず。如來と佛陀とは本迹不二の關係なり。

久遠實成の如來は迷没の衆生を救濟せんが爲に、跡を人類に垂れて攝化の益を施す。如來は天の月にして佛陀は水中の月に例ふ。水中の月も不一不異の關係を以て影現す。

舊 約 と 新 約

世界一切の人類を救濟し攝取する大宗教は人類の起原と共に起原したるものならん然して生物の進化と共に人の精神生活の宗教史に於てもまた人文の歴史と共に宗教心にも及び、教理も未開の宗教より漸次に高等なる宗教に進化したることは否定すべからず。

我佛教も亦印度古代の宗教より系統的に進み來りて、系統階級によらずして發元したるものに非ず。

佛陀が阿羅漢等の數論師につきて學びたるも、それらの宗教は非想等の客觀に目的を置いて、客體が主觀的なるか客觀的なるか未だ確定し難きが如し。

予は淨土教は大乗經として佛説なりや非佛説なりや、また須摩提極樂は去此不遠ま

た西方彼岸何れなるをも關しない。只子が斯の金文が宗教的經驗の上に自己靈感として、斯經が何の時代何人に依りて編せられたか、またまた原始佛教と如何なる關係を有するかの議論に非ず。歴史と若しくは宗教學上の問題にあらず、人生問題に對し、宗教の實驗に對して、二千有餘年の今日靈光灼爛として吾人の心靈に輝き照す心靈の實驗に於て、毫も異なることなき如きに到りては、吾人は此眞理を疑はんと欲すと雖も能はざるなり。

宗教的靈的實驗の外に、前後に列する處の叙事詩の如き神話の如き（折拙）の如きは敢て深意を以て之を解せず。然るに世の宗教を説くもの全く自己の内的靈驗に訴へず、唯に主張文字の上にある。若しくは聖善導聖法然の宗教的内容の如きは斯の教祖の靈的内容と毫も異なることなきものあらん。

若し諸君は自己の信仰的内容を此金文の間に如何に一致するか、また相違の起るかを比較し、而して自己の心智と靈性とに相應するやを判斷すべきなり。若し能く聖經を如實に取扱ふに非ずんば聖典何の龜鑑とならん。

更に此聖訓にして自己の信仰の爲にあらずして唯他の方便の爲に奉ずるとならば經文何の（斷絶）

彌陀の威神力と不可思議功德

宇宙間の萬有は悉く絶對不思議者から顯現してゐる。萬有の内存の一切智と一切能とから、常恒不斷に萬物を建設してゐる。之を世に造化の妙用と云ふ。萬有を建設する理性を法性の理ともまた眞如とも名づけてゐる。眞如が隨緣して萬物と成る。若し眞如を離れては一として行はるゝ理はない。眞如とは學語なので之を宗教的表語に云はゞ法身佛と云。然らば宇宙萬有は法身無量壽佛の一切智と能の働きの由て行はれる。

萬有には四時行はれ百物生ずる、天命的に行はる、之を法身の則と云ひ、神聖にし

て無上の權威にて肉眼に視ゆる萬物は（斷絶）

宇宙は絶對の靈樞、神秘の寶藏、萬有此三德秘密藏より生ず。絶對大靈眞如より現じ來るを如來と云ふ。

如の密藏界と現界。靈妙不思議より出て衆生を。

絶對大靈界より世界に現はれたる尊者を世尊と云ふ。

絶對界と世界。

如來は絶對大靈界より相待生死の世界に生たまひ、三界の世尊として自ら世界の教主と成りて奇特不思議の門を開き衆生を降化し玉ふ大權威者である。衆生攝化の第一歩として神秘奇蹟を示し玉ふ。

（胎藏）

毘盧の身土不二にして、依正互に相融し、性相同じ眞如にて、遍く法界に充滿し、大我身口意平等に、大空虛空の如くにて、虚空をもて場とはし、法界をもて床と爲す。如來は此道を慧らんと、理智の二法身を示し、智の法身實相の理に住し、自他の受用せんがため、三十七品現じては、一切を不二の道に入れ、理の法身如々寂照に位して、法然常住不動にて、動しては八葉自受用より、三（一）曼荼示しては、十界大空を證せしむ。理と智は廣略異なれど、本來一法殊異なし。

胎藏曼陀羅

行者菩提心を發すること、父母の和合の因縁なり、種子が初めて胎に入り、漸く増長行業す、胎兒まで育てる（一）始めて父母（二）に生る、猶し眞言門に入り、大悲方行學びては、淨心顯現せば、嬰兒の成長諸技藝を習ひて、通じて事業を施して、菩薩淨心の中にして、方便自他を修めては、隨緣物を利し、衆生度（三）大悲胎藏とは名づく。

妙觀察智

宇宙如來の智慧内容無盡にして、若くは感覺的抽象的の象相、一切の物心を開發して性徳を開發するを用とす。

法佛の内容に感覺的抽象的の無盡の象相豐饒なることは、たとへば應佛の釋尊の觀念内容に十方一切の十界三千の性相重々無盡の蓮花藏世界も悉く海印三昧に炳現する如し。即ち法佛に内容に具備する象が釋尊應身の觀念内に顯はれたるに外ならず。

宇宙は是如來自境界なり。全體は法佛如來體なり。

妙觀察智の中に法然として十方三世の事理として包含せざるなし。其理事性相と無盡なる象を了別するを察智。若しは自然界の萬物に若しは心靈界に、如來の察智ならざる處なし。一切萬物に不思議の徳を具するは是察智なり。

察智の用とは應佛が自ら觀念内に一切の事理を明らかに知りて衆生の機根を觀じてそれに應じて説法して智慧を開かしむるを用とするが如く、

法佛は内容豐饒なる事理として具せざるなく、之を開發して一切に啓示するを用となす。

藏性より分れたる小宇宙の動植物に至るまで、いかに微細なるものにも具はらざるなし。

小宇宙たる吾人に注意把住また知覺記憶想像思想等の知力的性ありてよく思想し觀察する如く、また天才の精神よりは詩頌文章樂譜繪畫など、想像に湧出すが如く、宇宙藏性の内容に豐備せる性能が秩序的に開發し顯示したる或一方面は自然界にして靈妙なる一方面は心靈界なり。大にして宇宙全體を盡し小にしていかなる微少なる動植物にいたるまで各此察智態の形式を具せざるなし。

若しは不識的に若しは意識的に察智の性を具し、また開示の妙用をなす。

察智を例せば、

意識的人の心理について云はば、人の知力として賦せられたる認識注意把住等の智識の構成に關する、

知覺記憶想像思想直覺等の人の智力とは察智性とす。

宗教の思想觀察冥想觀念によりて顯現したるもの、

察智の用とは、

一、植物の花は不識にして雌雄交感して精髓を結合して第二の自己を造る。

心靈は神人兩性の靈感三昧冥合して佛知見を開示して法王子となる。

二、人に知能あり、教師の教授によりて其が刺激となりて知能を開發して知識活動する等。

昭和四年三月十五日印刷
同 二十日發行

年七冊制は廢止

年拾貳冊 貳圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區磯町五五
印刷人 小林 七 太郎
電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水邊二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番